
魔法少女いおな マギカ

暇零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女いおな マギカ

【Nコード】

N0989Y

【作者名】

暇零

【あらすじ】

折れない翼が、少女の心に宿った。そして、彼女は戦い続ける運命に身を投じた。傷付き、いつかは命すら落としかねない過酷な事実を背負ってまで、彼女は何故……。

これ以上は、私からではなく、語るべき者に語ってもらおう。彼女自身の、その言葉で。

0話 始まり、始まり。(前書き)

珍しく、前書きと後書きを書いてみたいと思います。

0話 始まり、始まり。

唐突にアレだけど、皆願い事ってあるのかな？ 私は、ちょっとした奴があつたね。

でも、それはちょっと風変わりな願い事で、父さんも母さんも私の願い事を聞く度にちょっと苦笑い。でも、私は本気でそれを叶えたかつたんだ。誰でも持つてる願い事と同じくらいか、それ以上にね。

父さんは、私の憧れだった。あんまり家に帰ってこないけど、いつも鋼の翼で空を飛んで、皆を護ってくれていた。そんな父さんが、私の自慢でもあった。

でも、あの日。父さんは翼を折られ、地に墜ちた。

原因ははつきりとはしていないけど、たぶんバードストライクでエンジンと尾翼をほぼ同時にやられて、どうしようも無くなった。陸の上を飛んでいたから、市街地に被害を出さない為に父さんは飛び続けて、山間部に墜落。最期の最期まで他人の事を考えていたのか、動作不備の無い事を示す為に父さんは墜落の直前に射出座席を起動。脱出してもしなくても死ぬ事は解り切っていたのかも知れない。当然、全身を強く打って即死だった。

遺体との対面で、私はそこに寝ているのが父さんだとは信じられなかった。母さんは、泣いていた。そうして何ヶ月かして気付いたら、母さんも泣いたまま衰弱と過労で私の側からいなくなっていた。

だから、私は空を護りたかった。父さんが死んでから、その事は私の中で一番大きな位置を占める様になっていた。

だから、私は父さんの後を継ぎたかった。大好きな父さんの様に、なりたかった。

「力が欲しいのかい？ 僕なら君の願いを叶えてあげられるよ？」

だから、私は『彼』に誘われた時に、迷う事は無かった。

「その代わりと言っては難だけど……僕と契約して、魔法少女になつて欲しいんだ！」

だから、私は人間である事を放棄した。正直、鬼や修羅になつても私はこの空を護る力が欲しかった。

魔法少女になつて、私は新しい『敵』を知った。父さんの事故にも関係しているかも知れないと、『彼』は言っていた。だから、私は『敵』を倒す。倒し続ける。父さんの仇、そしてこの空を汚す奴は許さない。

だから、私はこの力で、戦う事を決めたんだ。空を自由に舞い、魔女を切り裂く私の色の翼で。

ただ独りだけで天を翔る魔法少女の物語……。良かつたら、ちよつとだけ見て行かない？

0話 始まり、始まり。(後書き)

プロローグから暗めですが、始終こんな感じでは無いので安心して下さい。

もうちょっと明るいパートとか、バランス良く振って行ければと思ってます。

1話 お久し振り、見滝原。（前書き）

今回は初戦闘、初登場、そしてちょっとしたオリジナル要素とネタ…
…。
スピード感とかの演出は要練習ですね。

1話 お久し振り、見滝原。

ちょっと栄えてる未来的な印象と普通な印象が混在している街、見滝原。私は今、その街の中心に近い高層ビルの屋上。正確には、屋上のフェンスの上に立っている。この香り、この肌触り、何もかもが懐かしい。空気も私の帰って来た事を祝福してくれているみたいだ。

『はるー、マミっち。元気してた？』

ふと、私がこの街を出る前に組んでいた同業者の気配を感じ、魔法のテレパシーを送ってみる。念話って言うのが正しいみたいだけど、私的には何か言葉の響きが踏ん張ってるみたいであまり好きな名前じゃない。

『久し振り、イオナ。今少し取り込み中なんだけど　そうだ、手伝ってくれるかしら？』

『んー、分かった。1分くらい稼いでくれたら、その内に着くから』

　　少しだけ緊張した様な声の調子から考えると、向こうはたぶん戦闘中なのかな？　個人的にちょうど運動もしたかったとこだし、お誘いに乗ってみるが……　応答、無し。こりゃ急いだ方が良いかな、やっぱし。

　　そう判断し、私は一気にフェンスを蹴って夜の空へと飛び出す。右手の中指にはめられた指輪の翠の宝石が煌めき、私の魔法を發動。オリブドラブ一色の適当なTシャツとカーゴパンツだった私の服は、肩を出した感じのちよつと変わったワンピース風の衣装に換わり、腰とブーツからは半透明の翼の様な刃が伸びる。宝石と同じ色、私の髪と同じ色の服と翼が風を受けてはためき、そして私の体は、

鋭角な前進翼が生み出す魔法で重力を振り切って飛行を始める。

具体的に、力を望んだ私。イメージしたのが父さんの乗っていた戦闘機だったからか、私はさっきまで話していたマミ　巴マミ、私と同じ年の魔法少女と比べて、更に攻撃的な能力の魔法少女となっている。脚や腕を軽く振ればそれだけで姿勢を変えられるし、魔力の莫大な消費量とは引き換えに極限まで速さを引き上げれば、他の魔法少女には私を捕捉する事すら困難になるだろう。現在進行形で魔力を使っている私は、照準器代わりに右眼の辺りに設置されたソウルジェムの汚染が始まっている事が分かる。

「私は貴方に教えたい　孤独な疾さで蒼空を飛ぶ　私は貴方と話したい」

軽く歌でも歌いながら、空気抵抗その他諸々の物理法則を蹴り飛ばして加速する。確か契約の時に、『彼』はエントロピーがどのとか言っていたが、何か関係あるのだろうか。熱力学も航空機には密接に関わっている理論だが、私みたいな非流線型飛翔体にも適用されるかどうかまでは、まだ詳しく知らないから良く分からない……。やっぱり大宇宙的な何かを飛ばしているのだろうかと思うと、それはそれでオモシロいんだけどね。

「……………ここか。通り過ぎるところだった」

車並みの速度で巡航していたから、正直結界の印とかは小さくて見落としてやすい。ソウルジェムの探知機能が低かったら、間違い無く見滝原を永遠にさまよっていた事だろう。

「……………よしっ」

結界を正面に捉え、一旦空中で静止。呼吸を整え、袖に刃を展開

してから顔の前でクロスさせ、私は結界に飛び込む。頭から爪先まで僅かに水面を潜る様な感覚が走り、再び重力に従って着陸する頃には、そこは既に異界だった。

腰の大きな翼を閉じ、周りをぐるっと見渡してみると、大量の鍵、鍵、鍵……。南京錠から電子ロックまで、様々な種類の鍵が無造に浮かんでいる。さしずめ、『錠前の魔女』ってとこなんだろうか。拘束系の魔法なマミとは、お互いに基本的な手は読めているはずだから、応用の出来た方が勝てるだろうし……。

『ちよい、マミ。今着いた。どこ？』

簡潔にまとめた言葉を投げても、相変わらず返事は無い。気配だけはあから、昏倒させられているか、それとも念話の通じない問題でも出たのか。そのどちらにしても最悪命に関わる大問題だ。

考える前に急がなきゃ。袖と脚の刃だけで体を浮かし、結界に入る前よりも速いスピードでマミの気配がある部屋へと突っ込む。腕の刃でドアを叩き斬り、轟音と共に転がり込むと、そこには鳥と鍵を象った様な無数の使い魔。そして、それ等のボスである、魔女。金庫を頭にした不細工な針金人形、というのが手っ取り早い表現だ。12頭身くらいもあって手足が妙に長い、デザイナーはもう少しデッサンを丁寧にした方が良かったかもね。

「イオナ……！」

上空から聞こえてくる声は、間違いなくマミの物。見上げてみれば、透明なロッカーが空中には幾つも浮いていて、その中にはマミ以外にも何人か人が閉じ込められている。マミと前に会った時に着ていた制服と同じ服装の子もいて、その子達も怯えた表情で私に助けを請う様な視線を向けている。

「合つ鍵を1つ1つ見つければ何とか」
「ごめん、それ私の趣味に合わないんだ。だからちよつと待っててね」

ピンクの髪を2つに結つた少女が、囚われている内に必死に考えた結果を言うが、私はそれを途中で遮る。正直魔女の前でこんな宝探しの真似事をする訳にも行かないし、ひらひらふわふわ飛んでるこの連中はそう簡単に捕まりそうに無い。そして何より。

「たかが魔女とその使い魔の分際で私の空を……！ 断り無く飛ぶんじゃないああいつ……！」

絶叫。そして跳躍。私の声で振り返る使い魔達は一斉に集合して迎撃態勢を整えようとするが、それは私みたいな攻撃方法を持つ魔法少女にとっては絶好のチャンスだった。

「ぜえありやあああああつ……！」

群れの中に踊り込むと、そのまま腕と脚を目一杯に広げて体ごと振り回す！ それだけで、10匹くらいの使い魔が断末魔の悲鳴すら上げる事も出来ずに切断され、無様に地面に落ちていく。当然の報いだ、私はこんな連中に飛行を許した覚えなぞ無いのだから。

盾となる使い魔を失つた魔女の行動は早かった。チェーンロツクが魔女の周りに8本程現れたかと思えば、それは私に向かって蛇の様な動きで伸びてくる。

「そんな攻撃じゃあつ……！」

進行方向を軸にロールシザースしながらチェーンの何本かを切断。暴力と破壊から生まれるプリミティブな黒めの情熱が私の心に侵食

してくる。それが私に隙を作らせたか、鞭の様にしなるチエーンが私の腹を殴打した。

「いつつ　！」

クソ野郎……！　心の中で激しく罵りながらも、私を殴ったチエーンを振り払い、今度はそのの上を走って魔女の近くまで。チエーンがまた増えて伸びて来ても、それ等は簡単に避けて絡ませて対処出来る。

声が、聞こえた様な気がした。でも、私は刃を振り上げた。そして、魔女に向かって刃を振り下ろした。魔女に刃が刺さり、体重が乗せられ、一気に真つ二つにする。

たぶん、絶叫だと思う。そんな騒音が響き、私はそれを聞きたくないが為にもう一度両手の刃を振りかざし、今度は粉微塵になるまで魔女を切断する。

「……願いからも呪いからも自由になって、ゆっくり休んで。空飛んでてもいいからさ」

結界が崩壊していく中で、ぼつりと呟いてみる。囚われていた人も解放されて地面に立っており、今まで自分が置かれていた奇妙な空間から現実へ帰還した事を喜んでいたり、今まで起きていた事が何だったのか理解出来ずに呆然としている人もいる。その中に、マミとその下級生っぽい子もいて、私は安心して息を吐き、格好を私服に戻す。

「あの、ありがとうございました」

さっき声をかけてきた、ピンクの髪の子が頭を下げている。マミ

の方はもう1人の青いショートカットの子と話をしているから、たぶん対象は私という事になるのかな？ まあ、途中から実働戦力は私だけだったしね、うん。

「いやいやー、そんな大した事はしてないよ。今回はたまたま綺麗に決まっただけでさ」

適切な返しの言葉を心得ていない為、取り敢えずひらひらと手を振りながら笑いかけてみる。高速での飛行と刃の連続多数生成、ちよつと派手目な空間機動で、私にかかる負担は大した事になってはいるんだけどね。

「でも、お陰で助かったわ。もう少し遅かったら、私も、他の人も、どうなっていたか……」

複雑な表情で言葉を濁すマミ。下級生ズもどうしていいのか分からずに黙り込み、沈黙だけが幅を効かせてしまっている。これではいかんでしょーよ、折角助かったのに。

「ていつ」

マミの目の前までちよつとジャンプして、軽くデコピン。ちよつと驚いた様な表情でこつちを見上げてくるが、すぐに私の考えを理解し、笑顔に戻る。何が起きたのかよく分かっていない子達の為に私は口を開いた。

「生きてる内に、笑えるだけ笑つとかないとき。助かったなら助かったでいいじゃない、みんな無事なんだよ？」

そう言って、笑いながら親指を立てる。それだけで、2人は分か

つてくれた。何で魔法少女じゃないこの子達が結界の中に、マミの側にいたのかは良く分からない。だけど、悪い子達じゃない事は確かだろう。マミが側にいる事を許しているっていうのが、何よりの証拠だ。マミは怒らせると、ちょっと怖い。見え難いけど確実に、分厚い壁を作って他人を自分の領域に入れようとはしない。……私も初めて会った時にはやんちゃばっかりしてたから、なかなか口を聞いてもらえなかったな。

「そう言えば、イオナにはこの子達を紹介しておかないとね。キユウベえに見出された魔法少女の卵、鹿目まどかさんと、美樹さやかさん。私の後輩、見滝原中学校の2年生よ」

あ、やっぱしそうなるのね。マミと同じ制服だもんね。

……つて。ちょい待って。魔法少女の卵ってどういうこっちゃ。

1つの街に1人の魔法少女つてのがセオリーだと思ってたけど、こつて何なの？ 魔法少女の重力特異点^{ブラックホール}？ 確かにこの街には独特の空気がある様に思えるけど……もしかしてそれを感じ始める頃にはシュヴァルツシルト半径の内側に入っちゃってるって事なの？

「あのー……イオナ、さん？ つて、マミさんのお友達なんですか？」

考えに埋没していると、青い髪の方、美樹さやかの方が私に尋ねてくる。相当深刻な表情で考え込んでいた様に見えたのか、かなり恐る恐ると言った口調だ。

「ん……ああ、確かにそうなるね。ちょっと諸用でここ2週間くらいはこの街からいなくなってたけど、今日からはまたここで暮らす事になるかな。また会ったら、その時はよろしく」

「私と同じ年の魔法少女で、天風イオナ。性格とかは……見て分か

る通りね」

ワントンポ遅れてしまいなながらも軽く解説して、後はマミに任せ
る。ちよつとシツレイな言葉が聞こえた様な気もしないでもないが、
ここはスルーしておこう。よろしくお願いします、と揃って頭を下
げるまどかとさやか of 可愛らしい仕草で眼福も出来るしね。

「それにしてもマミ、さっきの奴に何で捕まっちゃったのさ。あの
程度なら簡単に攻略出来そうな気がしたんだけど……」

「ごめんなさい、ちよつと安心というか、気の緩みが……ね」

まどかとさやかが話をしている間に、こっちもこっちで反省会ス
タート。マミの頬を軽くつつきながら訊いてみれば、理由は簡単な
物だった。確かに私は精神的なサポートをそこまでしてはいなかつ
たし、たぶんまどかの方だと思うが、あの子の内 of どちらかがマミ
を励ましたりしちゃったのだろう。それに甘えて……って言い方は
キツいかも知れないが、それがマミに隙を生じさせてしまったのか

「のびのび戦うのは構わないけど、死なない程度にね。あのままだ
と、マミ以外にも他の人達までブロンズ像にされてたかも知れない
んだから」

再びごめん、と謝るマミの頬を軽くつまみ、少しだけ注意する。
同い年の友達は少ないし、その中で魔法少女という運命共同体的な
人はもつと少ない。いや、もしかするとマミ1人だけかも知れない。
そんな大切な人に死なれちゃ、正直この先この魔法少女業を私独り
でやっていける自信は無い。そういう私の思いも伝えられたか、マ
ミは真面目な顔で頷いてくれた。

「……ところで、ブロンズ像にされるってどういう事なの？」

……ウルサイ。

1話 お久し振り、見滝原。（後書き）

今回みたいな感じで進めていけたらなと思ってます。
色々と使用しているネタが偏っているのは仕様じゃ〜と言ってみたり。

イオナ「でも、全部分かる人って少ないんじゃない？」

がっくし……。

2話 面倒は嫌いなんだ、私。(前書き)

今回から少しずつ本編とのアクションのタイミングがズレて行きます。

あくまで二次創作であり、本編とはまた別の物語と言う事で、悪しからず御了承頂ければ……。

2話 面倒は嫌いなんだ、私。

「結局、この後どこで過ごすの？ まさか宿暮らして事は無いわよね？」

今後の身の振り方を考えるべく、4人でママの家に向かう途中でママが私に話し掛けてくる。まどかとさやかも少し気になっているのか、合計3人分の視線が私に集まった。

「一応大丈夫かな。また山霧のおじさんを頼る事になると思うけどね」

山霧さんと言うのは、父さんが墜ちた時に一緒に飛んでいた人だ。父さんとは隊の中で一番の仲良しだったとかで、その繋がりを使ってちょこちょことお世話になっている。父さんの遺した資産の管理とかもやってもらっているから、たぶん生きている内に何らかの話が冗談混じりでもあったんじゃないかと思う。

しかし今は、それよりも気になる事がある。

「ママ、気付いてる？ 5時方向距離150、毎秒1.1ちよい」

先程から絶え間無く続いて感じられる、魔法少女の気配。ママの抜き打ちの射程圏内キルゾーンに踏み込んで尚、僅かずつではあるが接近して来る。絶対に避ける自信があるのか、自殺願望でもあるのか。少なくともママが本気で狙った場合には私でも避けられるかどうか怪しいし、一番最初に喰らった時には、負担を度外視した私の最高速で避けようとしたにも関わらず鎖骨の真ん中を狙った射撃を左肩の付け根辺りで受けるのが精一杯だったくらいだ。良くは分からないけど、戦車砲に使われる高速徹甲弾を参考にしたとかしないとか言っ

ていた覚えがある。

「当然、気付いているわ」

短く言って、しかし戦闘準備までには至らない。ゼロ・レンジで仕留める気なのだろうか、マミの表情に何かしらの感情を見出す事は出来ない。

まどかとさやかを前に並ばせ、マミと私で後ろを固める。こうする事で、近付いて来る謎の魔法少女から後輩ズを守ろうと言うのだ。……最も、私の場合は基本的に半径1mちょい以内までにしか攻撃出来ないなので、盾になるか近接防御しかやる事は無いが。折角戦闘機をイメージしたのに、何でリヴォルヴァーカノンとかバルカンみたいな力が無いのかな、私……トホホ。アクティブホーミングミサイルやロケット弾ポッドとまでは行かないまでも、そのくらいはあっても良いじゃないのさ。

いやいや、今はそんな事考えてる場合じゃない！ 後輩ズの真珠のお肌のに傷一つ付けちゃならないのだ。歩いて来る方向からある程度予測される攻撃範囲を割り出し、その全てをカバー出来る位置に立ち、少しだけ相手にも分かる様な形で警戒の眼差しを向ける。黒の長髪、服装は既に戦闘の用意をしているのか、私服では無い。それとも、正体を悟られたく無いのかな？

「！」

視線が、ぶつかった。一瞬だけ、驚いた様な表情を僅かに覗かせ、その直後には確信めいた表情に変わる。心の中で、ロックオンされたと言っ事を知らせる警報がけたたましく鳴り響いている。

『マミ、さやかとまどかを連れてちょっとだけ離れて。2秒に1歩分ずつくらいで』

たぶん、私がいなかったとしたら、狙われるのは後輩ズの内のこと
ちらかか、あるいは両方だ。恐らく私がいる事は想定外だったんだ
ろう。ここで食い止めて目的を探り、無害な様であればそのまま私
と一緒にマミ達と合流すればいい。有害であれば、どこまで出来る
かは分からないが実力で排除するまで。デストロイ。

マミ達との距離が少し離れた所で、改めて黒い少女に向き直る。
私も手には何も持っていないが、

「そこをどいて」

「断る。保持している武器があれば捨て、手を頭の後で組んで氏名
目的を述べよ」

山霧さんや洋画で学んだ衛兵用語をアレンジしてぶつけてみる。

手元に散弾銃とかがあればもうちょっと威嚇としては効果的だった
んだけどね。

「貴女には関係の無い事よ。私を通しなさい」

少しだけ怒気を含ませた声。そんなに通りたければとっと攻撃
開始すればいいじゃないのと思うが、何か不味い事でもあるのだろ
うか。直接戦闘能力が低いとかかな？ どの道、勝負は長引けば長
引く程良いってね。自分で言うのもアレだけど、この距離で相手の
行動を見逃してやる程私は甘くは。

「消えた……！？」

一瞬。それ以下の時間も与えなかった、はずなのに。黒い魔法少
女は、私の目の前からいなくなっていた。

『ごめんマミ、例の娘に逃げられた！^{アソウ} 警戒、密にしてッ！』
『分かったわ、イオナも気を付けて』

クツソ。こういう時には、マミみたいに優しい言葉をかけてくれる人よりも、軽く毒を寄せたりしてくれる人の方が欲しいと思っ
てしまう。別にMツ気があるわけでは無いが、軍隊気質なせいで口
も悪い方が戦闘時の会話としてすんなり出来ると言うか。

とにかく、今は急がなきゃ。人目を避ける為に路地裏に入り、魔法少女としての姿へ。変身って言った方が良いのかな、コレ？

「うわ っと!?!」

何も考えずに垂直上昇したら、何かが私に覆い被さって来た。これもまたあの魔法少女の妨害!?

「だとしたら、徹底的に追っかけてこの落とし前を付けさせてもらおうじゃない!?!」

落ちてきた物 ボロボロの防水布みたいな物をマントの様に体に巻き付け、翼を展開。そのまま一気に加速し、私は飛行と更なる上昇を開始。どこぞのスーパーロボットみたいな感じだが、アレは基本カラーは赤だ。ちよつと残念。

『イオナ、さっきの子が来てしまったわ。目的は鹿目さんの様ね、なるべく早めに来てくれるかしら?』

げ、マジか。正直スピード上げると継戦能力落ちるから、そこま
で使いたくは無んだけど……仕方ない、非常時と言う事で四の五
の言ってる場合じゃ無いしね。

それに、あの魔法少女が敵だった場合、時間が経てば経つ程私達

に不利になる。マミだってそう何十分もたせられるとは限らないし、それだけ後輩ズに対しての危険が大きくなる。もし何かあったら、魔法少女でも無い彼女達に申し訳が立たないし、それに私がそう言うのは一番嫌いな事だ。関係無い人を巻き込むのも嫌いだが、ある程度関係を持つてしまった人を巻き込むのはもつと嫌だ。それが、あの子達みたいな良い子達だったら、特に。

「巡航、最大加速。これで！」

言葉と同時に、私は弾かれた様に飛び出す。一瞬だけ目の前に白い壁が立ちはだかるが、それすらも突き破って突撃する。ただのベイパーコーンだ、何も心配する事は無い。これが音速の壁だったら、地上はちよつと窓ガラスが吹っ飛んだりと大変な事になっている事だろうけど。

ちなみに、魔法の結界の中では戦闘最高速度は当然音速を超える。自重する必要も無いし、魔法少女がいたらいたでそれなりに防御は出来るはずだし。

「見付けた！」

早速の発見。毎秒250m近くの亜音速領域で飛行していれば、普通はこうもなるよね。

マミを挟んで、まどかと黒い少女。何か話してるみたいだが、ここからじゃ聞こえない。困惑するまどか、笑顔を浮かべながらも完全に怒ってるマミ、それ等を受けて尚表情を見せようとしない黒い少女。一体何がしたいのか、何を話しているのか。マミをあそこまですさせるって事は、私の経験則から考えるに他人をリアルで踏み台にしたりとか、そのくらいしか思い付かない。

とにかく、私の存在はまだ気付かれてはいない。さっきの問答や消滅で腹も立っている事だし、ここは一発ぶちかましてみよう。マ

ントを羽織ったまま翼を縮め、真上から重力に従って垂直落下、これは避けられない。きつと！

「どおりやあああつー！！」

5mを切つてからの絶叫。声に驚き、反射的に上を見上げて、更に目を見開く黒の少女。顔面に足跡付けられたくなかったら、そういう反応は止めた方がいいんだけどね……！

「くっ……！！」

避けようとしながら、左腕にある盾を操作する黒い少女。恐らくあれが、魔法少女としての武器なのだろう。マミのマスケット銃や、私の翼の様な。中央の円が開いて、何か機械じかけの物が見えた気がした。

「消えた……！？」

また、消えた。さっきと同じ様に。慌てて減速して着陸するが、それでも結構なスピードが出ていたのか、アスファルトにはちよつとヒビが入ってしまった。荒っぽい所業に驚いたのか、まどかが軽く縮こまってしまった。後で謝つとかないとかな？

「何なのよ、あいつ。いきなり出て来たと思つたら、ワケ分かんない事ばかり……！！」

余程あの黒い少女が気に食わなかったのか、さやかは少し怒ってる。まあ、仕方無いつちゃ無いかな。あんなのにいきなりエンカウントして、何か言われたら……ねえ？ 絶賛電波発信中、みたいなの？

「それにしても……一体何者なのかしら。私達の名前は知っていたのに、イオナについて訊いて来るなんて。確かにここの所見滝原にはいなかったにしても、あの情報量ならば少しは知っていておかしくは無いんじゃないかしら？ それに、何か焦っていた様にも見える……」

どういう事なんだろう、私だけ知られてないって。そこまで重要な情報じゃないから調べてなかったとか、そう言う事なのだろうか。うむ、深まるばかりの謎だらけだ。頭を使うのはそこまで好きじゃない……。だからって脳筋なわけじゃないぞ、勘違いしないでね。

「あの……あの子、私のクラスの転校生で……それで、学校にいる時も、さっきみたいいな事……」

「ああー、どこかで見た事あると思ったら！ そうか、あいつだったのか……」

……おいまどかちゃん。そーゆー事は早めに言おうぜつ。そしてさやかちゃん、君も知ってたなら早く気付いて教えてよつ。

「転校生……確か、暁美ほむらさん？ 変わった子だった事はクラスでも噂になってたから知ってたけど、まさか魔法少女だなんて……」

うおーい、マミも知ってたのかーい。私だけ知らないでガチ戦闘準備してたって事かーい。そんなの無いよーう。

落ち込む私を余所に、マミ達はその暁美ほむらなる魔法少女に対してどう対応するかを話し合っている。防衛に徹するか、徹底的に無視するか、話し合いの場を設けて和解策を探るか。それぞれマミ、さやか、まどかの意見。まどかは優しい子だなあとつくづく思う。そこを悪い奴につけこまれたりしなきゃいいけど。

「やあ、イオナ。久し振りだね」

話に参加せずにマントにしていたボロ布を指先で弄っていると、懐かしい奴が現れた。私が魔法少女になるきっかけを作った　と言うより、きっかけその物の一部である、キュウベえ。白い小動物みたいな体に赤い宝石の様な目は、ぬいぐるみにしてプライズ景品にしたらたぶん良く売れる事だろう。

「久し振りー、キュウベえ。確か、前に会ったのは私が車輪の魔女を倒した時だっけ？」

「恐らくそうなるだろうね。あの魔女は強敵だったから、良く覚えているよ」

うん、大体3週間前くらいの出来事だ。あの時はマミと組んでから少しこなれてきて、初めてコンビネーションでの戦闘をやったんだ。私が攪乱しながらちまちま武器になる物を切って行って、マミは少し離れた所から徹底的に頭を狙撃。最後には私が思い切りぶっ飛ばしたのを、マミがフルパワーの砲撃でファイニッシュしたっけ。

「で、キュウベえは私に何か用事でもあるのかな？」

「まあ、あると言えばあるかな。用事と言うよりは、お願いと言った方が近いかも知れないけれどね」

ふわふわと触り心地の良い尻尾を撫でながら、軽い気持ちで訊いてみる。しかしその問いに対するキュウベえの答えは、予想からは少し外れていた物だった。

「あの少女　鹿目まどかには、物凄い才能がある。魔女に対する戦力としてはこの上無いものだから、是非とも魔法少女になって欲

しいんだ。だから、彼女を魔法少女にするのを、手伝ってくれないかな？」

2話 面倒は嫌いなんだ、私。(後書き)

イオナ「ねえ、私かなり無茶ばっかしてる気がするんだけど」

気のせいです。

イオナ「それにあのマント、拡散ビーム撃つたりトマホークぶん投げたりしろって？ 何考えてるのよ、無理に決まってるでしょ」

最近はずたの通じる人が周りに少なくなってきたから、1度でいいからやってみたかったの！

3話 何てこった、畜生。(前書き)

結局は戦闘シーンを書いていると落ち着く事に気が付きました。
銃器の登場シーンだけ文章がおかしい事になってるかと思いますが、
そこはスルーしてあげて下さい……。

3話 何てこった、畜生。

予想外。それに尽きる。

マミと私が組み、曉美ほむらがいて、その上でまどかまでが実働戦力として魔法少女になってしまったら、それは魔女の一方的な駆逐になり、多発している魔女問題の早期解決にはなるだろう。だが、それまでの道程として、単純にグリーンフィードの供給が成り立つんだらうか？

私だけかも知れないが、魔女を倒さず、使い魔に人が襲われそうになったらその場だけ蹴飛ばすなりして撃退はしておいて、人的被害が出るのを最小限に食い止めつつ魔女化するのを待つ事だって無い事は無い。正直、私の戦い方は燃費があまり良くないだけに、皆に嫌われそうな手段に出なきや私自身がもたないんだ。マミには教えていけない。嫌われるのは、まだ慣れてないし、好きじゃないから……。

「当然、無理に、とは言わないさ。君には、既に魔法少女として契約してもらったと言うだけで感謝しているからね」

そう言いながら、キュウベえはくるりと尻尾を回す様にして振る。いつも通りの彼のやり方だ、強引に押し切る事も無く、ただ相手が動くきつかけだけ与えて、相手の出方を見続ける。悪いとは言わないけど、子供相手には物凄く有効な、高度な戦略だとは思っね。こう言う駆け引きが苦手だからか、ちょっとだけ羨ましかったりもする。

「そ。なら私は悪いけどパスかな。あんまりチームって言うのは似合わないだらうし」

正直、マミと一緒に戦えている、と言うのもかなり運の良い事だと思っっているくらいだ。私みたいなゼロ距離での格闘に対応した戦術は限られて来るし、それを編み出すにしても使うにしても相当なテクニックが必要になるはずだ。敵に密着している味方に当たらない様に、敵に有効打を与える様に、そしてそれが命中する事で味方が更に攻撃等をしやすくなる様に。半端じゃない難しさだと思う。だから、マミには少し感謝しているし、なるべく負担のかからない様な立ち回りを探してもいる。

「でも、本当にまどかやさやかが『魔法少女になりたい』って思っんなら、応援はするよ。一応、こんなでも魔法少女の先輩ではあるしね」

そう、本当に魔法少女になりたいのなら。 。
少なくともあの子達は、私みたいな理由で魔法少女にはならない事を願うよ。

「じゃ、私はちょっとあちこち寄り道してくから、みんなまたねー」
「イオナさんも、おやすみなさーい」

結局、まどかもさやかも先輩宅に寄っていたら遅くなった、という言い訳で帰宅の遅くなる事を親に了解させ、それぞれの家に帰って行く。マミは目を細めて微笑み、まどかは礼儀正しくお辞儀をして、さやかは元気に手を振っている。私はそれに右手を挙げて応え、私の目的地へと歩き出す。目的地と言っても、所詮はコンビニだ。この時間だとスーパーも開いていないし、山霧さんのところに厄介になるなら何か持って行った方が良さだろう。

「イツキさんはチーズ派だけど、アヤセさんはハム派なんだよなあ。どうして夫婦なのにあそこまで趣味が違うんだらう？」

飲むのは同じ1500円ちよつとの赤ワインなのに。私がまだお酒を飲んだ事が無いから分からないだけかも知れないけど、それでも本当にあの2人は自分のコダワリに関しては一步も譲ろうとしな
いからなあ。

……まあ、座布団やカルビよりもモツ煮込みやハツ塩や味噌シロ
コロが好きだ私が言えた事じゃないかも知れないが。14、5歳で
この趣味って、アリなんだろう？ と疑問に思う事も無くは無い
が、でもオイシイから好きでもいいじゃん、って思ってるんだけど
ね。

コンビニに入ると、いらっしやいませ、と、万人に対して同じ笑
顔を振りまく店員をスルーし、酒類の近くのツマミが置かれた棚へ
直行する。他は飲み物以外に特に買いたい物は無いし、お財布の中
身は大抵2000円以上になる様にしていても、あまり多くの物を
見ると買いたくなっちゃうかも知れないし。自己管理が大切なのは、
父さんから長い事教わってきた事の1つだし、守らないとね。

「イツキさんにはシェールで良いとして……。アヤセさんどうし
よう、ロースにするかボンレスにするか……」

どうでも良い事かも知れないが、ワインに合わせて添え物を変え
るのはとても重要……らしい。料理もそれぞれが美味しくてもセツ
トで出された時に食べ合わせや見栄えが悪いと美味しさ半減するの
と同じ理屈かな？ 後5年待って、私もお気に入り組み合わせが
見付けられるとイイな。……おい、ビールに焼肉って言った奴出て
来い。

「お会計、972円になります」

レジに向かうと、思ったより少し高い表示に軽く驚く。しかし、中学生にしか見えない様な子供がこんなおつまみ買ってる事に動じない店員や、コンビニの癖に地味に品揃えの良いおつまみコーナーを思えば、そっちの方がもっと驚きだ。取り敢えずカウンターに1000円札を出し、レシートとお釣りを貰うと、その内8円は募金箱へ。常に人の為に、これも父さんの口癖の1つだった。私に出来る事は限られてるかもだけど、こうしてちまちまとやってけばいつかは大きい事に役立ててもらえるかな、とは思ってる。基本的には私に忠実ではあるけど、こうして人の事もきちんと考えてるんだよ？
ありがとうございました、の言葉を背に受け、私は再び冷えた空気の中へ。でも、地上に輝く灯と、夜空に瞬く星の光が私を包み、心を温めてくれる。

「綺麗……」

そう呟き、軽く息を吐いた所で、私は私の後ろに立つ者の気配に気付く。

「誰に何て言われようが、これはあげないよ。高かったんだし」

「私がそれを欲していない事は分かっているはずよ、天風イオナ」

冗談を言いつつ振り向くと、予想の通り。そこに立っていたのは、晧美ほむらだった。最初に見た時と同じ、魔法少女の衣装で、夜の闇から滲み出る様にして現れる。

「単刀直入に訊くわ。貴女、何の為にここへ戻って来たのかしら？ いえ、何の為にここにいるのかしら？」

何の為に。……あまり、考えた事無かったな。確かに、空を汚す奴が許せないなら、秋田辺りにでも行ってロシアや中国の領空侵犯機を徹底的に叩き落としてれば良いんだし。でもさ、それじゃちょっと違うんだ。好きな友達がいて、義理だけど家族がいて、家があつて、みんなの笑顔があつて……。それら全部を、さ。

「護りたいから……。かな、たぶん。良くは分からないけど」

自然に、口から言葉が出ていた。

「私の父さんは、みんなを護りたかった。結局死んじゃったけど。母さんもそう。だから、父さんと母さんの子供の私も、同じ様に護りたいんだと思う。あくまでたぶん、の話だけどね。ホントは自分でも半分くらい分からないんだ」

戦う理由は、違う。でも、ここにいる理由は、それとはまた違っても良いんじゃないか。そう思えるから、私はここにいる。本当の理由なんて本当は無いのかも知れないけど、今仮初の物だったとしても、理由が頭に浮かぶなら、まだここにいられる。

「じゃ、私から逆に質問。貴女にとって、まどかはどんな人なの？」

初っ端からまどかにアタリを付けて来たって事は、ただの転校生じゃない。魔法少女ってだけでもそうだが、それ以上に何らかの目的があると見て間違いないだろう。

彼女の表情が、少しだけ変わる。あんまり好意的な感情は持たれていないのか、眉間に僅かにシワが寄っているのが見える。

突然、彼女はその手に拳銃を持つ。上部が大きく切り欠かれ、銃口付近のサイドは絞り込まれる様な処理は、それが自動拳銃の中でもピエトロ・ベレッタM92である事を示している。……トリガー

ガードの外に指が出ているからこそ見分けられるわけで、トリガーに指がかけられてたらこんな呑気な事は言ってもらえない。ちなみに、ガードの形が丸型じゃなくて滑り止めの付いた角型だから、M92の中でもM92F^{タイプ}って型のバリエーションになるね。細かい事は必要じゃないかもだけど、念の為。

「9mm^{パラベラム}×19弾では私は墜ちないね。良い弾である事は確かだけど」

それは、私が保証する。そう言う前に、彼女はトリガーを絞った。世界がスローモーションの様に感じられた。撃鉄が倒れ、銃口から光が弾き出され、スライドが後退し、薬莖が排出される。そこまで視認してから、世界は再び元の速度を取り戻した。

「……ナルホドね、予告くらいは欲しかったけど、この際仕方ないか!」

コンビニのビニール袋を地面に置き、両の拳を打ち付けて『変身』。そのまま左脚を振り上げ、彼女の側頭部目掛けて全力の回し蹴りを叩き込む。

しかし、それが彼女に命中する事は無い。彼女の弾丸も、私の蹴りも、互いを狙ったのでは無く、互いに密かに近付いていた使い魔を正確に破壊していたからだ。

「結界はただ現実の風景を気味悪いエフェクトかけて左右反転させただけ、使い魔は6本脚の手鏡。分かり易いにも程があるんじゃない、『鏡の魔女』さんよオ!」

鼻息荒く宣戦布告を叩き付け、左手の中指を突き上げる様に立てると、一斉に突っ込んで来る使い魔達に正対する。

「曉美ほむら、何て呼べば良い？ 三人称が代名詞のまままで考えるのもダルいけど、フルネームでも面倒だからさ」

「好きな風に呼べば良いと思うわ」

これでようやく2回目の名前コール。どこから取り出したのか、素っ気ない返事は突撃小銃アサルトライフルの半自動散弾銃セミオートショットガン。フランキ・スパス15を構える音と共に帰って来た。少し視線をほむらに流して見ると、丁度箱形弾倉ボックスマガジンを装着している所だった。恐らく散弾キャニスターと単体弾スラッグが両方入っているのだらう、薬莢の色が2色、交互に並んでいる。

「確か、イタリア軍国連平和維持部隊の制式採用モデルだよ、それ……。さっきのベレッタもそうだけど、仮にも『魔法少女』の武器がそれで良いの？ お約束的にちとマズいんじゃない？」

「それを一発で見破る貴女も貴女で、魔法少女以前に女子中学生らしからぬ趣味及び知識量と思すべきね」

冷静と言うより一種冷徹な、普段より更に感情を見せない切り返し。それは既にほむらが戦闘に集中している証拠だらう。無表情のまま銃口を使い魔達に向け、無情の00バツクを撃ち込む。魔力で更に威力が凶悪になった9発の鉛玉は、8mmと言う大きめなモデルガンの弾と同じサイズである事を意識させない威力で、地面ごと使い魔達を穿ち、一撃で戦闘不能に至らしめている。……正直、怖い。こんなのを振り回してるのに後衛を任せてもし誤射でもあったら、間違い無く腕やら脚やらが吹っ飛びそう。今ほむらが使ってるスパス15で考えると、いくらマグナムが撃てないとは言え、12ゲージの弾、それも魔力で強化された物が直撃なんてすれば、例え魔法少女でも耐えられはしないだらう。……防御に重きを置いていない私は、特に。

「9分55 いや、8分25秒で片を付ける。使い魔は頼んだよ、ほむら！」

翼を展開し、一気に空中に飛び上がる。それを追おうとして使い魔も何匹かジャンプするが、私の高さに届けないばかりか、格好の的としてほむらに次々と撃ち落とされている。それを後ろに見ながら、ある程度の高さから周囲を見渡し、そして、『現実には無い物』を探す。魔女が根城にするなら、そう言う所だろう。

「……分かり易過ぎるんだって、そういうの!!！」

見付けたのは、市営の運動場。そのスタジアムは、今や不気味な鳥籠とも何とも形容し難い物になっており、その隙間から何かが蠢いているのが見える。

兎に角、突撃。ファーストストライクさえこっちの物にしてしまえば、後は完全にペースを自分の物に出来る。そう思った矢先だった。

「なあっ !?」

籠が解け、それを構成していた帯が真っ直ぐにこちらに伸びて来る。何本もの追撃に回避したくてもし切れず、籠まで後15mと言う所で捕まってしまった。

「くっ、離せ、このっ!!」

必死に抵抗しても、のらりくらりと上手くかかる力を分散させて、決して私を離そうとしない。鏡の魔女じゃなくて触手の魔女に改名したらどうだ、この変態野郎! 私はお前の餌じゃない!!!

「うわあああっ!?!」

抵抗空しく、私に対する興味を失ったらしい帯に放り投げられる私の体。しかしあるう事か帯は、その本体を構成している運動場だった所へと私を放り投げていたのだった。

3話 何てこった、畜生。(後書き)

イオナ「ねえ、何で私あんだだけ銃器ッ娘になってるの？」

いや、いいじゃん……。

イオナ「それに、SPAS15ってさあ。もうちょっと見栄えの良
い派手なチヨイスあったでしょ？ MP5 AA-12とかさ」

確かにアレは片手で撃てる程度に反動小さいけど、フルオートで3
50bpmを叩き出す様なバケモノを使わせたら絶対君の出番無く
なるでしょ？

イオナ「確かに……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0989y/>

魔法少女いおな マギカ

2011年12月30日00時48分発行